

その乍ら、△「つらく」此の詩の筆跡を見ると、此れは正しく一休禪師の書である、それだから一と言いてあるのだ、これは「大變な事だ」と振り返つて見ますると一休早や彼方の路を下り給ふ處、一山の僧衆「サアお止め申せよ、過言をあやまらねばならぬ」といふや、一生懸命に走りつきまして、お引き留め申して○「これは「一休禪師とはつゆ知り申さず、御無禮ばかり致しました何卒今日は特別を以て御赦し下さい、先々坊中へお這入り下さい」と慇懃に謝罪の言葉を述べますると、「いや／＼何もそんなに斷るまでの事はない」といつて、御機嫌よく坊へお歸りになりました。ひじり達色々御馳走を薦めました。やがて一休皆々に厚く禮を述べて下向し給

うた。暫しの後一人のひじり、○「かやうな名僧は、又と登山し給ふ事があるまいから、此の機會に、大師の御影に讃を願ひしたならば如何であらふかに」と申しますると、皆々何れも賛同して、それでは今一度戻つて頂かふといつて、又追つ驅けて参りますると、一休振り向いて、「何事かなあ」とお尋ねになると、かやう／＼と申入れますと、「それ位の事は戻らないでも出来る事ぢや、急いで御影を持つてお出で」といつて、道のほとりの茶屋に腰掛けて休んで居られました。人々いよ／＼驚き、大師の讃をなさるゝのに、何の思案もなく立ながらなさるゝとは、さても博學の活僧である中心から敬意を拂ひました、やがて大師の御影を持つて参りますると、一

休忽ち筆を執り

弘法大師活佛 死ねば野原の土となる

さら／＼と書きしたゝめて、逸早く山をお下りになりました。

熊野山中の二休

或年一休紀州熊野の大権現へ御参拜になりました。折しも風暖かに春も花咲く四月の半頃でありますから、山々谷々の櫻は、今を盛りと咲き誇つて、實に得もいはれぬ美しい眺めであります。一休拜殿に上りまして、此の絶景に恍惚として居られます處へ、一人の社僧がつか／＼と参りまして一休に向つて、僧御免下さい、お見受け

申しますると、貴僧は唯人とは思ひませんが、失禮乍ら何誰でございますか」とお尋ね申しますると、一休答へて云はるゝには、「仲々愚僧は唯人ではござらぬ、御覽なさい、出家にてござるぞ」と申さるゝと、彼の僧心の中に、さても面白い御僧だわいと思ひまして暫くの間色々とお話ししました、一休心に此の坊主は少し話せると思召されて、高野山で作つた詩の事を思出し、此の山でも一首作つてみやうと思ひ、矢たてを取出して、さら／＼と山形の詩を書いて彼の僧に與へられますると、彼の僧恭しくそれを神前に供へまして、僧「さて／＼見ごとな御筆跡でございます、都のお方と思ひますか如何でございますか」と申しますると、一休答へて、「よくもお

察しあつた、愚僧は紫野の「一休」といふ者ぢや」と仰せらると、僧さ
てはかねぐ承はつて居ります一休和尚さままでございますか」と
いつて、先刻神前に捧げて置いた詩を持つて参りまして、僧甚だ恐
縮至極に存じますが、願つても叶はぬ事、何卒此の詩に、御名をお
染め下さい」と懇願致しますると、一休直に其の詩の下に「一休老
人偶題」と御記しになりました、其の詩は次に記す如くであります

山里放光

山瀧吟落碧三

山海浪高船片雲社

山廟等一扶桑神片漲景

此の詩のよみ方は

山廟等一扶桑神	山客成群數萬人
山海浪高船片片	山樓鐘動月輪輪
山瀧吟落碧雲漲	山谷洗流煩惱塵
山里放光三社景	山花猶馥本宮春

さて彼の僧は、一休和尚を自坊へ請して、さまざまに待遇しまし

山客成群數萬人輪塵春

山樓鐘動月輪惱宮

山谷洗流煩本

山花猶馥 一休老人偶題

た、折ふし花盛りでありますから、内のお庭の花をも御覽下さいといつて、酒肴を出し色々とお慰め申しまして、それから又彼の僧のいふには、僧貴僧は再び此の山へお越し下さる事は、何とも計り難く存じますから、末代の寶に何か一筆お書き下さいお願い申します」と頼みますると、「それは易い事であると」仰せられると、彼の僧「甚だ申兼ねますが、此の山奥に住む無學文盲な我々でございませうから、先刻の詩のやうなものは逆も讀めません、何うぞ愚かな我々でもよく譯る見なれ聞きなれた事をお願い申します」といひますると、一休軽く點頭さ給ふ折ふし、そよよと吹く春風に、櫻の花が一片二片バラ／＼と散るのを見給うて、

さくらちる木のした風はさむからで
空にしられぬ雪ぞふりける
と一首よみ終つて、「此れは何うか」と仰せられると、僧いや此れもまだ聞きなれぬお歌で何とも合點が参りません」といふ折しも又櫻の花が風に散らされて、をちこち亂れ飛ぶのを見給うて
雪やこんこあられやこんこ御寺の

かきの木に一ぱいふり積れこんこ
とよみて、「これはいかに」といはれると、彼の僧大變に笑ひくづれ乍ら、僧「さてもく／＼をどけた御僧でございませうよ、いかに見なれ聞きなれたのをと申しました處が、それは又餘りでございませうよ」

と申しますると、一休和尚も打笑ひ乍ら、「それは尤もちや、それでは所望の通り耳にもなれ目にもなれた一首仕らふ」といつて

きねが鈴海山木こり谷のころ

入相の鐘に庭前の花

と遊ばすと、彼の僧望み叶つたりと打喜び、僧さても名歌でござい
ます、これならば耳にも慣れ目にも慣れて居りまして、至極結構で
ございます」と厚く禮を述べまして、又色々御馳走を致しました
一休此の上なく満足に思召して、「次手であるから東坡の詩を記念に
書き遺して行く」といつて、さら〜と筆を走らせ給うた。其の詩
は、

此の詩のよみ方は

山花發茂林

山遠路幽深

山僧

山鳥菓來

山雲飛片儉問

山花發茂林片食道

山遠路幽深沈吟尋

山水碧沈抱相

山猿樹還

山客

山雲飛片片	山鳥菓偷食	山僧來問道	山水碧沈沈	山猿樹抱吟	山客還相尋
-------	-------	-------	-------	-------	-------

法力の試合

一休泉州堺町へ御下向になりまし時、淀の河瀬船にお乗りになりました。折しも乗合にひとりの山伏が居りましたが、一休に向つていひまするには、山「御坊は何宗でござるか」と問ひをかけました。一休答へて、「愚僧は禪宗でござる」といひなさると、山伏今一段と威武々になつて、山「禪宗には我等のやうな靈験がございますや

い」といひますると、一休洒々然として、「イヤ仲々靈験多い事でござる、其方に於て奇特な事があるとならば、見せて貰ひたいものだが」といはると、彼の山伏、山「それでは此の方の法力で、此の船の舳に、不動明王尊を祈出して、お目にかけてませう」といつて、山「一に逝多伽童子、二に鞞羯羅童子」と珠數押しすり乍ら祈り初めました。乗合の人々は何事が起つたのであらふと、互に目と目を見合はして、彼の山伏の顔を見守つて居りました處が、案の如く船の舳へ、火燄赫々たる裡に、不動明王尊が顯はれました。其の時山伏澁面を作つて、山「各々方拜み給ふか」と申しますと、皆々いかにも靈験奇特であるといつて伏し拜んで居りましたが、一休少しも不思議

議に思召さぬ風體であります。すると山伏一休和尚に向つて、山いかに禪僧ぜんそうどの、かやうな奇特は如何でござるか一と、いと高慢こうまんげに云ひ振ふりました。一休山伏きうやまぶしに向つて、「我等の靈驗れいけんは、體からだから水みづを出だして、彼の火燄くわえんを放はなつ處の不動尊ふどうそんを消す事ことでござる」といつて暫し禪定ぜんぢやうに入つて、やがて不動尊ふどうそんの火燄くわえんに、小便せうべんを垂たれかけ給ふと山伏やまぶしの法力はふりきも盡つきて、火燄くわえんは忽たちまち消きえて終しまひました。乗合のりあひの人々一休きうを伏ふし拜まがむ事こと、神佛しんぶつの如ごとくでありました。斯かくする中に時は過すぎて乗合のりあひの人々は皆々船ふねより上あり、陸路りくろを行ゆきますると、向むかふから大たきい犬いぬが、ワン／＼と吠はえかゝつて來きました、山伏やまぶし又一休きうに申まうすには、山いかに御坊おんぼう、先刻せんこくの法力はふりき比くらべにこそ負まけたが、彼の猛たけ々しい

犬いぬの吠はえて居ゐるのを止とめ、此方こちらへ呼よび寄よせる法力はふりきを較くらべやうではござらぬか」といひますると、一休答こたへて、「それはいと易やすい事ことでござる、先まづ其方そなたから祈いのつて御覽ごらんせよ」といひ給ふと、山伏例やまぶしれいの赤木あかぎの珠數じゆずをさらり／＼と押おしもみ一心しんこめて祈いのりましたが、犬いぬは依然いぜんとして吠はえて止やまず、又またこちらの方ほうへ近寄ちかよう様子やうすもありません。山伏やまぶし今は一生懸命しやうけんめいに汗あせを絞しぼりつゝ様々さまざまな印像いんざうをくむやう、アピラウンケンソワカだの、ボロン／＼だのと、有あらゆる陀羅尼だらにや呪文じゆもんを稱なへまするけれども、何なんの驗しるしもありません。一休きうをかしく思召おほしめして、「山伏やまぶしどの、其處退このちのきなさい、此方こちら共どもは、アピラウンケンもソワカも入いりやせぬ、彼の犬いぬの怒いかりを止とめて、直すにこちらへ呼よび寄よせるか

ら」といつて、懐から中食のむすび一つ取り出して、犬に一目見せて、コロコロと、呼び給ふと、今まで怒り狂うて居た流石の犬も、むすびを一目見ると、遽かにをとなしくなつて、クンクンといつて尾を振り乍ら、一休和尚の足許近くに來ました。山伏は却つて、耻の上ぬりを演じまして、悄然として立去りました。それを眺めてゐた人々は、一休和尚の活作畧に感じない者はなかつたといふ事でありませす。

花の所在

一休或年常陸の國の香島宮へ御參拜になりました。やがてお社近

く進み入らせ給ふと、鬱蒼たる森の中から、何とも見別のつかぬ身の長け七尺餘の大入道が、しづくくと出て參りまして、一休に向つて、入「佛法とはいかん」と質問の矢を放ちました。一休泰然として「己々の胸にあり」と答へ給ふと、大入道三尺の秋水をスラリと抜拂つて、一休の胸元へつきつけて、忽然らば割りて見ん」といひますると、一休少しも恐るゝ色なく

春ごとに咲くや吉野の山ざくら

木をわりて見よ花のありかを

と徐ろに此の古歌を詠じ給うた。すると彼の大入道の姿はいつしか雲霧の如くに消えて終つたといふ。

青空を笠に

一休或年關東から都へお歸りの道すがら、或大名と覺しき人と、後になり先になりして行かれました。頃しも六月の末頃でございませから、暑さ甚だしいのにも拘はらず、一休和尚には脚絆甲掛草鞋のいでたちで、笠をもお冠りにならずして、一人とぼくくと歩いて居られます。彼の大名は他の大名とは違ひ、取分け惠深いお方でありますから、使ひの者をして云はしめるには、使「某は△△の使ひの者でござるが、御坊には此の炎天にも拘はらず笠をも召さず歩きなさるゝのを、わが御主君御覽せられ、少からず御同情召されて、

幸ひ持合せの古い笠もあることゆゑ、彼の御坊にお貸し申せよとの御仰せに従つて參つた者でござるから、此の笠を着し召されよ」といつて、其の笠を差し出しました。一休容を整へ禮を正しうして申さるゝには、「御志の程は千萬忝く、近頃以て有り難き儀に存ずるが、此の法師は、天を笠にかぶり居ります事故、暑くもぬるくもござりませぬ」といひ給ふと、使ひの者も、意外の返答に驚き暫し躊躇して居りましたが、やがて立ち歸つて主君に申上げますると、彼の大名も顔振を縦に振つて大「成程あの坊主唯人ではないぞ、馬の蹴あげもかゝらぬやうに、道をよけて通せよ」と申されました而して猶ほも相前後して、此の驛より彼の驛、彼の驛より又其の次

の驛と、道を辿りまする程に、いつしか日は西の山に入り、晚鴉空しく時に歸り行く頃となりました、彼の大名の一行は然るべき宿を求めまして一休和尚にも、「心をきなく同宿しなさい」とその大名からの申傳へでありましたから、同じ宿に泊り給うた。其の夜大名から又使ひの者を送つて云はしめるには、「〇某は晝の中貴僧に笠をおすゝめ申したる者でござるが、旅は物憂いもの、殊に此の頃の暑さでは、嚙ぞ御疲れ召された事でござらふ、只今御主君から一献差し上げ申さふとの思召しでござりまするに依つて、こちらへお出で召されよ」と申入れますると、一休答へて、「それは過分の儀に存じまするが、お言葉に甘んじて」といつて、使ひの者に案内されて、

奥の方の大名のお居間へと参り給ふと、彼の大名何とも云はず突然に大聲を出して、大いかに御坊、人に會ふ時は笠をぬぐのが、和國の習ひと承るに何とて笠をぬぎ給はぬか」と申さると、一休其の言葉の下にすぐと、「二ぬぐとも掛け置くべき處がござりませぬ」と答へ給ふと、これは紫野の一休和尚に違ひないと、覺られましていよ／＼様々の御馳走で、旅情を慰められたといふことであります。

瓢箪の曲藝

一休和尚は出しぬけに、世間の人々を驚かし給ふことが間々あり

ました。或時お手もと拂底の事がありましたから、物のすさびがてらに、一條戻り橋の一角に、高札を立てられました。其の文に

一此の度日本老和尚一休三明六通を得て瓢箪をひつくりかへす御望みの方々御見物可有之者也

但し今月今日より初め申し候

と書きまして、紫野に芝居の構へなごなし給ふと、洛中洛外老若男女貴賤貧富の區別なく足を宙にして馳せ集りました。やがて時を見計らつて一休やをら群集の前へ出て來られました。待ち設けた群集は拍手喝采の裡に一休を迎へました。見れば一休御衣を召して、前には大きな瓢箪をぶらさげ、兩の手に撥を持ち、東より西、西よ

り南、南より北と、飛び廻り跳ねかへり幾回となく繰返し、やがて又大音を張りあげて、タンヒヤウ〜と瓢箪を倒し、また叫び乍ら凡そ二十間程馳けまわり跳ねまわりし給ふた後、樂屋へと走り入り今度は御自分で太鼓をドン〜と打ちまして、「ハイ是れがかわり〜」といつて、残らず逐ひ出し給うた。見物の人々の中には、案に相違して茫乎佇んで居るものもあり、又非常に興がる人もあり、或は今に初めぬ一休さまのをごけであるといつて面白がつて居る者もありまして、やがて三々五々に分散しました。

ぬしは何處へ

都は比叡の山嵐に、道行く人の耳もひき裂けんばかりに寒く、鴨川の水も將さに氷らんとする冬空に、雪さへ降りみ降らすみの、時しも極月の末つかた、一休和尚には所用あつて今の帝國大學のある吉田町へお越しになりましたして、歸途今出川にさしかゝりますると、磧の中に、丸裸になつた一人の乞食が横臥して居りました。一休御覽なされて、此の冬空に嘘ぞや寒いことであらふ、哀れ不憫やと思召して、自分の身に纏ひ給ふ小袖を一重ぬぎ、彼の乞食に着せ給うた。けれども彼の乞食は少しも喜ぶ色もなく、黙つて其の着物の袖に手をうち通しました。一休不審に思召して、「さても不思議な乞食ではないか、一錢二錢の施しでも、有り難く推し戴き伏し拜むの

が、乞食のならひであるのに、其方は少しも嬉しく思はぬのか」とお尋ねになると、彼の乞食徐ろに答へて、乞御身はわれに小袖を呉れて、嬉しく思はぬか」と云ひました。一休手を拍つて、「あゝ愚僧の誤りであつた。一大事のさとりはこゝである、いかにも此の方は唯人ではないぞ、愚僧の愚痴を齧らして下さつた、あゝ實に嬉しい」と、獨言をいつて、掌を合はせ目を塞いで、禮拜し給ふ中にいつしか彼の乞食の姿は消え失せて、後に残るは彼の小袖ばかり。

薬師の靈驗

大和の國峰の薬師如來は、靈驗殊にあらたかな御佛にましくして

参詣の人は春夏秋冬常に絶へないさうであります。或處に瘡の病に惱める人がありまして、かねて聞き奉る此の御佛に祈りを捧げて此の病を癒やし貰はんものと、七々四十九日の間跣参りの誓願を立てまして、雨の日も風吹く日にも毎日々々怠りなく一心こめて詣うでました。斯くすること四十餘日に及びまするけれども、未だ何の驗もございませぬ、此の人自ら思ひまするには、是れ程一心こめて願つても未だ何のお驗もないとは、これは又何たる事であらふと其處が凡夫の悲しさに只管に如來を恨み奉つて、さんかくに悪口を致しました。折しも一休和尚が其の地方へお下りになるといふ事を聞きまして、急いでお迎へに出まして、早速と其の由を申上げます

ると、一休和尚の仰せらるゝには、「それは如來の靈驗がないのではないぞ、其方の信が足らないのぢや、唯々其方の身を恨みなさいしかし乍ら愚僧が代つて祈つて上げやう、歌を一首上げるから今晚参つて此の歌を詠まれよ」と、いとも懇ろに宣ふと、彼の病人も此の上なく喜びまして、急いで峰の薬師へと参りますると、時宛も五月十二日でございますから、参詣の信男信女口々に、「南無薬師瑠璃光如來」と御名を稱ふる人、或は「現世は安穩に後生は安樂に」と祈願をこめる人、或は「我れを助け給へ彼れを救ひ給へ」と佛前に跪く人など、何となく物騒がしくして心が静まりませんから、一人内院に黙座して居ります中に、参詣の人は次第々々に去り、や

がては人の聲さへ聞こえずなりました。夜は深く更けわたり、薄暗き燈明の影に黙然として端座する彼の病める人のみとなり交したやがて彼の人徐ろに佛前に進み出まして、かねて一休和尚から頂いたお歌を懐中から取り出だし、嚴かに

南無やくし諸病悉除の願なれば

身よりほどけの名こそ惜しけれ

と詠み上げますると、其の聲まだ絶へぬ間に内院の奥の方から、いとく美しい玉のやうな御聲にて

村雨はたゞ一時のものぞかし

おのゝみのかさそこにぬぎおけ

此の御聲に連れ思はず、「あな有りがたき佛勅よし」と喜ぶ言葉の其の下に、暫しの間禮拜したまふ、其處に打伏して居りました。さて起ち上つて見ますると、長の間苦しみ惱まされた瘡は、跡形なく癒つてゐました。彼の人御佛の恩徳いや高きに、いよ／＼心に感じて其の日より發心致しまして、此の上は名も利も何かせんと心は光風霽月墨染の衣に憂き身をやつし、諸國行脚の途に上つたといふことであります。

馬ぢやげな

或年の事でございますが一休和尚、さる大名の家中の片岡彌太夫

といふ浪人の宅に御滞在の折り、所の地頭が聞きまして、使ひの者を以て、「和尚さまには、長の旅でございますから、嘸ぞお疲れの事と存じます。誠に見苦しうございますが、拙宅へもお越し下され、旅の憂さをお霽らし下さい」と申し入れますると、一休和尚、「よくこそお招き下さつた、何より忝く存じます」といつて、彼の使者と共に地頭の宅へお出でになりました。彼の地頭も光榮に思ひまして、「さまざまな御馳走をして心行くまで待遇しました。さて主人の地頭は一休和尚に向つて、甚だ恐れ入つてございますが、何にても貴僧の御手跡をお願ひ申します」と、申し入れますると一休和尚、「それは易い事でございますが、旅宿へ歸つてから書いて進

じまする」と云ひ給うて、程なく地頭の家を辭して彌太夫の方へお歸りになりました。間もなく地頭の使者が参りまして、「○先程お願ひ申しました御手跡を頂きに参りました」と申しますると、餘り性急なのに一休和尚も心せはしく思召したのでありませう彌太夫の書きさした手紙があつたのを使者に渡し給ふと、使者も喜んで持つて歸りまして主人に手渡ししました。さて開いて見まするといつも見なれた彌太夫の手跡でありますから主人も驚きまして、「此れは又不思議な事だ大かた使ひの者の誤りであらう」といつて、先きの使ひの者に尋ねますると、「使ひえ此れは和尚さまから直々にお渡し下さつたのでございます」と答へました。甚それでは此方が餘りおせさ

たて申したから御取違ひであらう」といつて又使者をやりまして、
 ○「先程下さつたのは彌太夫の手跡と見えます、何卒貴僧の書き給う
 たものを下さい」と申し入れますると、一休お顔に少し笑をたゝえ
 て、「それ程にお望みならば決して厭ひ申さぬ」といつて、したゝか
 物の這入つた袋をお渡しになりました、使者之を持つて歸り又主人
 に渡しました、さて開いて見れば、よごれた古い 禪が一ぱひ這入
 つて居るのに、主人初め皆々手を拍つて大笑ひしました。後の日又
 お越しになりましたから、今度こそと手跡をお願ひしますると、一
 休和尚思ひ切り大文字で唯「柳」とばかりお書きになりました。又其
 の家に古いく屏風がありましたのを、一休和尚にお目に懸けて申

しまするには、圭「これは至つて古い物でございまして繪もはつきり
 致しません。私の親共が申しまするには、馬か牛であらうと云ひま
 す」と申しますると、「牛ならば角があるが、角がなければ馬ぢや」
 といひ給ふ、圭「お次に此の繪にも讚をお願ひ申します」といへば
 「易い事ぢや」と御返辭遊ばして、又大文字で「馬ぢやげな」とお書
 きになりました。今も其の繪は或處に、世にも珍らしい寶物となつ
 て、奥深く秘藏されてあるといふ事です。

三猿會議

或寺の門の破風に三匹の猿を作りつけてありました。一匹は兩手

で耳を掩ひ、他の一匹は兩手で目を塞ぎ、今一匹は兩手で口を塞いで居ります。或日三人連れの人が、此の門の前に佇んで之を見て、色々考へまするけれど何とも合點が行きません、折柄一休和尚がこゝをお通りになり此の三猿を見て、打ちうなづいて笑ひ乍ら行き給うた。三人の中の一人が云ひまするには、×「只今こゝを通られた出家は、うちうなづいて行かれたから、定めし御存じであらうから尋ねて見やうではないか」と云ひ出しますると、他の二人も之に同意して、早速と驅けつけ一休和尚に追ひ付きました、○「若しく一寸お尋ね申します。只今御僧は彼の門前の猿を御覽になつて、うちうなづいてお通りになりましたが、定めし仔細御存じの事と思ひま

すから、何卒此の文旨の我々にお聞かせ下さい」と申しますると、一休和尚答へて、「サア其の猿の因縁は愚僧も悉しくは存せぬが、折角のお尋ねに知らぬといふも本意ないから、愚僧が嘗つてそれに就いて少しばかり聞いたやうに覺えて居る」といつて

何事も見ざる言はざる聞かざるは

たい佛にもまさるなりけり

と詠み聞かせて早々に振り返つて行かれました。三人の者共さても尤も至極なお歌である、此れは銘々の心得として無くてはならぬ歌である、さては今の御僧は神佛の現化であらうと、非常に感じ入りました。其の中の一人がまた申しまするには、×「いかに各々方よ

今日から三人ともに、此の歌の心をもつて、見ざる言はざる聞かざるの願を立てやうではないか」といひ出しますると、後の二人も同意して、今此の時から實行するやうに申し合はせました。折から遠寺の入相の鐘がゴーンと幽かに音響を傳へますると、聞かざるの願を立てた人が、思ひ出に堪えずして覺えず知らず

今日の日もいのちの内に暮れにけり

あすもや聞かん入相の鐘

と古歌を詠じました。すると言はざるの願を立てた人が、言何だ何だ、君は聞かざる願を破つたではないか、そんな根機の鈍い事では何うする」といつて、手を拍つて大笑ひしますると、今度は見ざるの

願を立てた人がわれ一人願を守つて居るといつたやうな顔をして、見「をい、君方は何を聞き何を言うて居るのだ、大願を破らぬ者は俺ばかりだ」といつて、三人共に願を破りました。世にも滑稽至極のお話しでございます。

猿の感謝

一休和尚伊豆の國行脚中の出来事でございますが、或樵夫が一匹の猿を柱に縛り就け打ち叩きまして、無慘や打ち殺されんとする處へ、折よく一休和尚が通り合はせ、不憫に思召して乞ひ取つて放してやりました。一命を助けて貰つた猿は、見るさへ嬉しげに泣く聲

も感謝の意を漏すが如くに山深く入つて姿を隠しました。一休縁あつて其邊で二三日錫を留められました。頃しも夏の事でございます。たから一休和尚には或夕、外に出て涼んで居給ふと、助けてやつた。くだんの猿が落の葉に山苺を包んで来て、一休和尚へ差し出しました。一休限りなく可愛ゆく思召して、布袋に豆を入れて與へ給ふと彼の猿も喜んで貰ひ受けて歸りました。暫くすると又重ねて先きの布袋に栗を一ぱひ入れて来て、一休和尚に差し出して歸つたといふ事でありませう。後の日一休和尚旦那の人々につくづく其の物語をして、畜生と雖命を助けられた恩をよく知つて居るものである、さすれば人間たる者が是非を辨へぬ事では猿にも劣るぞよと痛く感

じ入つてお話しになつたといふ事でありませう。

記憶すべき日

一休和尚もよる年波にいつしが老僧となられました。暑いにつけ寒いにつけ朝夕となく、親を思ふ情が一層切實なるものがありました。自らの親を思ふと共に又人の親を思つて、會ふ人毎に、人の子として親に孝行せねばならぬ、一日と雖親に孝行の觀念を忘れてはならぬ、孝行といつても六ヶしい事ではない、唯親に安心させる事である。何うしたら親に安心させる事が出来るか、それは一生懸命に働く事である、親に對する孝行の觀念、此れが君に對しては忠となり

他人に對しては同情となり、動物に對しては憐愍となる。就中孝行すべき日は諸經の中にコレ／＼出て居るといつて表を作つてお示しになりました。

- 正月元日 五百日ノ孝行ニ向フ
- 同十五日 百日ニ向フ
- 二月五日 三百日ニ向フ
- 同晦日 百日ニ向フ
- 三月三日 百十日ニ向フ
- 同十日 千日ニ向フ
- 四月十五日 五十日ニ向フ

- 五月五日 百日ニ向フ
- 同晦日 九十日ニ向フ
- 六月七日 二百日ニ向フ
- 六月十八日 七十五日ニ向フ
- 七月十三日 五千日ニ向フ
- 八月十六日 五十日ニ向フ
- 九月九日 二千日ニ向フ
- 十月廿九日 千日ニ向フ
- 十一月七日 五十日ニ向フ
- 十二月晦日 四萬六千日ニ向フ

附言

是れは如何なる理由に依るか、私自身にも譯りません。他日研究の上発表したいと思つて居ます。今は或はみなさんの御参考にもと思ひまして載せました。乞ふ之を諒せられよ。

一休の年賀

京都に遊んだ者は何人も知つて居らるゝでありませうが、正月一日二日三日の間は、何れの寺の僧侶も門外不出であります。これは一休和尚の年賀まわりから起因して居るといふ事であり、が年の初めと云へば昨日に變る人の心も自ら長閑に、初日の光り鮮

かに、都の山々は霞たちわたりて得もいはれぬ美觀を呈します。家々には朝日の御旗ひら〜と風に翻り松竹を立て、繩を引き廻らして、庭にはチウ〜雀の初物語り、男の童は爪を揚げ、女の子は羽子板をつき、一天四海貴さも賤しきも一盃の屠蘇機嫌に千代祝うて、世を秋風の心は露ちる程も知らぬ人々の状態でございます。一休和尚心におかしく思召して、鬮體を杖の先きにつけまして、元日のあさまだきに寺を出て洛中到處家々の戸口へ例の鬮體を差し出しまして、「お目出度う〜御用心〜」といつて年賀にまわり給うた。すると人々は「元日早々何事である」といつて非常に忌み嫌ひました。これが今に至るまで元三の中は僧侶を忌む起因をな

つたといふのです。さて或人が一休和尚に向つて、「是れはく和
 尚さまには御年始まりでございまするか、成程御用心とは尤もでござ
 いまするが、さやうな事を殊更に此の元日にしなさるとは、少し
 く合點が参りませぬ」といひますると、一休答へ給うて、「いやいや
 や愚僧も元日を祝うてこそ此の鬮腰を持つて歩くのぢや、世に目
 出度い事も數多いが、手力雄命が天の岩戸を開き給ひしより以來此
 の鬮腰はご目出度いものはない」といつて歌一首
 にくげなき此のしやりこうべ穴かしこ

目出度くかしこ是れよりはなし

と詠み終つて、「如何でござる、人間の目が出て穴ばかり残つて居

る鬮腰ぢや、これが何うして目出度くないのか」と仰せ給うのに
 皆々「さてもく大善智識さまだ」といつて感じ入つたといふ事であ
 ります。尚ほ一休和尚が門松を詠じ給うた有名な歌が世に傳へられ
 てあります。それは

門松や冥途の旅の一里塚

目出たくもあり目出たくもなし

一休末期の句

一休和尚の末期の句であるといふて世に傳はつて居るものは數々
 ありまして、何れが末期に臨んでの句であるかは判然致しません。

然し乍ら何れも虚事であると断ずる事は出来ません。何となれば誰れも彼れも、一休禪師の御影を持つて来ては讃を需め、或は自書自讃のものもありますから、茲には其の中の四つのみを記します。

(一) 借用申昨日 返濟申今日
かりおきし五つのもを四つかへし
本來空に今ぞもとづく

(二) 生也死也 死也生也

柳はみどり 花はくれなる

喝

柳不縁花不紅

御用心

(三)

柳は縁花は紅

行脚事畢 今日時節

折主丈子 燒二六月雪

虚堂之再來天下志和尙一休宗純末期書之

(四)

朦々而三十年 淡々而三十年

朦々淡々六十年 末期希糞捧梵天

一休珍話畢

一休珍話附録

我が心百十首

一休和尚作

我が心こころそのまゝまじ佛ほとけいさばとけ

なみをはなれて水みづのあらばや

悟さとり得えて心こころのやみの晴はれぬれば

じひも情なさけもあり明あけの月つき

そのまゝまじに生うまなからこころの心こころ

願ねがはずとてほとけ佛ほとけなるべし

こゝろをば墨の衣に染めなして

身をば浮世の道にまかせて

らくくと心にてこそ彼の岸に

渡るもやすき法のふな人

奥山にむすばすとも柴の庵

こゝろからにて世は厭ふべし

關守にわが心をやかしぬらん

すぐなる道を行きかぬる身は

澄みのぼる心の月のかげはれて

くまなきものはもとの境界

色相はそのときくんに變るども

不生不滅の心かはらじ

月は家こゝろはあるじと見る時は

なほかりの世のすまる也けり

はかなくもあすの命をたのむ哉

昨日はすぎし心ならずや

佛とてほかにもどむる心こそ

まよひの中の迷ひなりける

名と利とにかゝはる心引きかくて

まことつくさば二世はあんらく

妙にして神あるものは心かな

天地にわたりみじんにも入る

わが禪にきらふべき法あらざれば

心の中にいちもつもなし

口ほどに身の行ひのならざれば

わが心にもはぢられぞする

物事に執着せざる心こそ

無相無心の無住なりけり

戒たもち座禪念佛つとめても

こゝろあしきは造地獄から

體ありて凡夫心のなかりせば

本來空の無相眞佛

凡惱を即ばだいぞとなすことは

一ねんゑかうその中にあり

なに事も人の心にさかふこそ

世法佛法さわりなりけり

極樂も地獄もわれにあるなれば

あくねんおこる心制せよ

悪念はおこりやすくてじひ心は

おこしがたきぞものうかりける

財寶は身の仇なりと聞きながら

なほも求むる心はかなさ

一念のじひ眞實ぞたねとなる

九品の蓮華ひらけこそすれ

一念の中より迷ふ雲おこり

りんる永劫やみ路とぞなる

尋常に工夫観念つとめなば

まことの時に心うごかじ

萬法の行はよろづの事なれば

こゝろくくに道をつとめよ

成佛は異國本朝もろともに

宗にはよらず心にぞよる

一心にまことの道に入る人の

その行末は子孫はんじやう

國いづく里はいかにと人とは

本来無爲のものどこたへよ

寺を建て堂をたてたる功德より

たゞ常々のじひやましなん

年々にしぐれのそむるもみぢ葉を

四方のうつらふためしとも知れ

焼きすて、灰になりなば何ものか

のこりて苦をば受けんとぞ思ふ

三日月の満つればかけて跡もなし

とにかくにまたあり明けの月

ひゞくに行末どほくなりけり

何時をかぎりの命なるらん

待ち得てもほごはなかりしほとゝぎす

ともを誘ひていづち行くらん

妄執の雲をはらさで終る身の

なり果てを見よ地獄なるらん

しばしげにいさの一筋かよふほど

野邊のかばねも餘所に見えけり

煙り立つ野邊のあはれをいつまでか

よそに見なして身は残るらん

かりの世に仇なる露の身もちて

千とせを祝ふ人のはかなさ

ぬらしつる袖の涙のかわくまも

無きおもかげの月ぞ立ちそふ

露と消えまばろしと覺えいなづまの

かげの如くに身は思ふべし

世の憂うれさにかへてすみぬる柴しばの戸こに

とはじがほなる人ひともうらめし

妙たへなりて法のりの蓮はすの花はなの身みは

いく世よふるとも色いろは變からじ

歎なげくなよ誠まことの道みちはそのまゝに

ふたつともなくまた三みつともなし

ちれば咲さきさけば又また散ちる春はるごとの

花はなのすがたは如に來よ常じ住じゆう

蓮はぢ葉はのにごりに染そまぬ露つゆの身みは

たゞそのまゝの眞しん如に實じつ相さう

おのづから身みはいたづらになりにけり

虚空こくうをつねのすみ家かと思おもへば

生死いせしはの理ことわりしらぬ坊ぼうさまは

犬いぬのころもを着きたるなるべし

まつしまやみなみの海うみも極ごく樂らくも

池ち水すゐと同じ法のりの陸みち奥おく

極ごく樂らくの月つきまつ夜よ半はんの念ねん佛ぶつは

くもきり拂はらふ秋あきの西にし風かぜ

罪障ざいじやうの露つゆ霜しもふかき身みにもたゞ

座ざ禪ぜん念ねん佛ぶつ題だい目めぞよき

わが禪は教への外の宗なるに

往生要歌よむもおかしき

西方の本來空に往生し

無量壽佛となるぞめでたき

障りなく本來空にかへるこそ

これや西方往生と知れ

現在の苦修善行ぞ種となる

かならず來世安樂のはれ

いにしへの智識の教へじみとのみ

今は何とてがまんけんごん

をしくなる道は世界に事多し

唯しんじつに慈悲をたづねよ

たびはたゞ憂きものなるに故里の

空にかへるを厭ふはかなさ

書寫寺の僕のころもの虱どり

むかしの御僧いまはこひしき

心より四聖六凡いでぬるに

なにどて仇しゆ業はつくるぞ

佛性は四大和合の體なるに

五欲の塵をいかゞ引きけん

十方は唯一心の淨土なれ

衆生もつとめ己身彌陀佛

不義にしてあつめ貯ふ財寶は

つもりて後は二世の身のあだ

佛乘を世智辯僧やわる智識

世わたるせのとするぞ悲しさ

賣主して物とり食ふ沙門こそ

これぞ地獄のかすところなれ

比丘くのその身のつじはさておきぬ

ひとの道心やぶるうらめし

いまとき僧は仲々俗よりも

因果菩提を知らぬ佛盜

みな人の貪瞋愚痴の悪水は

三つの川の流れどぞなる

人の非は知りやすけれごをのが非は

智者も知ること難きことを聞く

世の中にわれを悟ると自慢して

名利もとむる人の多さよ

つらくと名利もとむる人見れば

慈悲ある人は佛ならまし

世の人の因果菩提を知らずして

五逆の罪をつくるあはれさ
名と利とをもとむることの苦患やな

人に使はれ財につかはれ

正法の花園の山の草や木を

むかしの春となすよしもがな

貴賤智愚僧俗男女別なれど

ぼたいの道はひとつ事なり

佛道に悟れといふは何事ぞ

因果菩提を會得するなり

一切の諸佛菩薩も悲願より

ぼたいねはんの成就したまふ

人はたゞ平生志願なかりせば

修身齋家もいかゞあるべき

身を入れて鳥けたものを救ひしは

釋迦の因地の修行なりけり

道はたゞ世間世外の事ともに

じひ眞實の人にたづねよ

戒持ち座禪念佛つとめつゝ

じひある人は佛ならまし

儒佛道をしへはたとひ得せずとも

生死大事と思へ人々

生は寄り死は歸るぞといふ事は

ふるき文にぞおほく見えけり

今とても天地の道の變らねば

まつ世のわれら菩提たのもし

當來の三會の春の花もまた

げんせのじひぞ種とならまし

釋迦もまたあみだもとは人ぞかし

われもかたちは人にあらずや

わが氣にはたとひ入らざる事なりと

人のいさめを用ひしたがへ

本來の無心無相の佛をも

五欲に引かれ凡夫とぞなる

阿彌陀佛さすればすなはち去此不遠

まよへばはるかかの西にこそあれ

佛説は菩提涅槃の眞理にて

二世安樂の教へなりけり

智恵あるは若きも道をつとむるに

老いて菩提を知らぬ愚かさ

みな人の涅槃常樂しらすして

生死無常をなげくあはれさ

何事も前世の業といふ人の

ぼだいつとめぬこれぞなほ愚痴

何事も定業なりといふ人も

まことの時^{とき}は驚きぞする

佛だに定業のがれたまはねば

やく因果の報ふさいはひ

善修すれど悪事きたると怨むなよ

先世罪業即爲せうめつ

福德は願ふに来るわざわいは

つゝしむ門に入らぬとぞ聞く

親主に忠や孝ある人々は

家にありても菩提たのもし

ものゝふの遁世修行手本とて

西行法師さては熊谷

熊谷が遁世修業功德みよ

怨親平等自他の成佛

世をのがれ修行の道は別でなし

智者愚者ともに座禪念佛

四大五蘊みな空にして申すこそ

まことの念佛座禪とぞいふ

儒釋道三つの教への別ならず

せんに善報あくに悪報

神儒佛三つの教へを説く人の

いづれの道もいらぬあさまし

三國の法はしなく多けれど

しやかの教へにまされるぞなき

三國の世々のかしてき君臣に

しやかの教へを仰がぬはなし

一休珍話附録 畢

三寶に歸依する世々のためし見よ

こくご安穩ごみんふくらく

みるごとにみなそのまゝのすがた哉

柳はみどり花はくれなる

大正六年六月十日印刷
大正六年六月廿日發行

(定價金五拾錢)
(送料金四錢)

著者 岩間月舟

發行者 東京市神田區錦町三丁目一番地
羽場順承

印刷者 東京市牛込區市谷谷町九拾三番地
矢部政吉

印刷所 東京市牛込區市谷谷町九拾三番地
サンデー社印刷所



發行所

東京市神田區錦町三丁目一
(振替東京二九四〇番)

大文館

178
1029



終

